



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

高林, 純示

---

CITATION:

高林, 純示. あとがき. 時計台対話集会 2009, 5

ISSUE DATE:

2009-02-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/176950>

RIGHT:

あ と が き



高林 純示

たかばやし じゅんじ

京都大学生態学研究センター長

今回の第五回時計台対話集会も、一時半から五時までの長時間にわたりました。当日、熱心にご参加して会場を盛り上げていただいた皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。残念ながらご参加いただけなかった皆様にも、この冊子を通して、熱い雰囲気をお伝えできたのではないのでしょうか。

生態学研究センターは「生物多様性科学」を標榜しています。「生物多様性科学」とは、「生物多様性を記述し、その創出・維持・消失のメカニズムを解明すること、さらに多様な生物間の相互作用が生み出す生態系の機能を明らかにし、その機能によってもたらされる恩恵（生態系サービス）を保全することをめざす研究領

第5回時計台対話集会 講演録 平成21年2月27日 第1刷発行

編集・発行 ● 京都大学フィールド科学教育研究センター

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 TEL 075-753-6416

● 京都大学生態学研究センター

〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3 TEL.077-549-8200

編集協力 ● サイファアソシエーツ株式会社

域」と定義することができます。生態学研究センターが中心となり、関連研究者コミュニティの支援を受けながら創成してきた新しい研究領域です。今回の対話集会は、生態学研究センターの「生物多様性科学」と、フィールド科学教育研究センターが同様に創成してきた新しい研究領域である「森里海連環学」とが融合したテーマでしたので、過去四回に比べると、かなり噛みこたえある内容になったのではないかと思います。

私も今回、最初からじっくり参加してみて、「生物多様性科学」と「森里海連環学」融合の重要性を感じました。皆様にも、「森里海のつながりを生物多様性から考える」という今回の講演、シンポジウム、対話を通して、何か心の中に、地球環境問題に関して今後考えるシーズ、すなわち種を持っていただけとしたら、私どもにとっても大変うれしい限りです。

本対話集会をひとつの契機として、生態学研究センター、そしてフィールド科学教育研究センターは、全国の関連研究者コミュニティと共に研究を進めていきたいと考えていますので、今後とも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

